

令和5年度宮崎市安井息軒記念館冬の企画展

息軒の娘

安井息軒の教育論



和宏

お須磨さんは、なかなか手に負えるものじゃございません。
弁舌が達者でございまして、第一、学問が男の書生よりできるんですから。

入館
無料

2024年
1月13日(土)~3月24日(日)

©池田和宏



- 会場／宮崎市安井息軒記念館 特別展示室
- 開館時間／午前9時~午後4時30分(最終入館は午後4時)
- 休館日／月曜日(祝日の場合は開館)・祝日の翌日(土日除く)

主催 宮崎市安井息軒記念館 NPO 法人安井息軒顕彰会
〒889-1605 宮崎県宮崎市清武町加納甲3378-1 TEL:0985-84-0234



虚像

イメージ

と

実像

リアリティ

1 息軒の娘

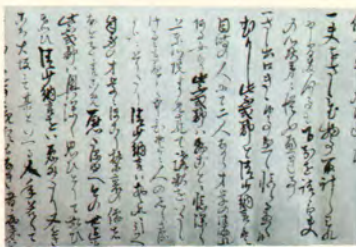
日本画のタッチで描かれた宇宙服姿の女性。異彩を放つこのイラストは、宮崎市在住のイラストレーター池田和宏氏の作品『Astro Girl』です。本企画展では、この異相の女性に、安井息軒の長女「須磨子」のイメージを重ねました。

須磨子という女性は文政十一年(1828)に現在の宮崎市で生まれ、明治二十二年(1889)に東京で亡くなりました。彼女は特に何か偉業を成したわけではなく、歴史的には「江戸時代の大儒者安井息軒の娘」であり、「幕末の攘夷志士中村貞太郎(北有馬太郎)の妻」であり、「明治漢学の泰斗安井小太郎の母」であるに過ぎません。ただ面白いことに、彼女の「鴻儒息軒の第一子として生まれ、『安井夫人』(森鷗外、一九一四年)こと川添佐代が育て上げた女性」というプロフィールが描き出す虚像と、書簡や逸話が伝える実像は大きく乖離しているのです。須磨子は、江戸時代に生まれ育った女性とは思えないほど非常にユニークな、ある意味、現代の日本人女性以上に現代的なキャラクターの持ち主であり、その人格形成には息軒の教育方針が大きく影響していたようです。

本セクションでは、息軒の育児論と女子教育論を紹介します。



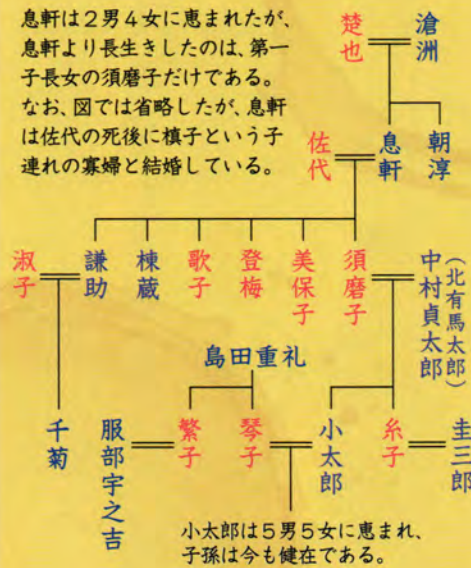
安井息軒「時務一隅」
大正2年(1913) 諸岩則俊氏所蔵
「如蘭叢話・後編」収録



須磨子宛安井息軒書簡
「妻の道五ヶ条」
安政2年(1855) *安井紀子氏寄託
*「安井息軒書簡集」は安政3年(1856)に撰る

息軒の家系(略図)

息軒は2男4女に恵まれたが、息軒より長生きしたのは、第一子長女の須磨子だけである。なお、図では省略したが、息軒は佐代の死後に槇子という子連れの寡婦と結婚している。



安井息軒は幕末維新时期を代表する儒学者です。寛政十一年(1799)、現在の宮崎市に飯肥藩士の次男として生まれ、飯肥藩校振徳堂で教鞭を執っていました。三九才で藩職を辞すと、妻子を連れて江戸に移住、三計塾を開きます。やがて開国により国内情勢は混乱、幕府は六三才の息軒を御儒者に登用し、息軒は老中首座水野忠精の詰問に答えて「時勢一隅」を上奏します。明治九年(1876)に東京で没しました。享年七十七歳でした。

2 息軒の教育論

「教育論」と銘打ちましたが、息軒には教育に関する専論はありません。したがって息軒の『救急或問』や『時務一隅』や『睡余漫筆』といった著作で教育に言及している箇所や、弟子たちの証言を元に復元するしかありません。今回は特に、①教育行政の必要性、②心の教育の重視、③小学校の設置(ヨコの関係)、④主体的な学びの四点に絞ってご紹介します。

息軒本人は袖が擦り切れるほどの猛勉強を重ねたことで知られ、渋沢栄一が「維新頃の儒者で博学という点で息軒に及ぶ者はあまりなかったとの評判である」と評したほどの博識の人でした。しかし、そんな息軒が育てようとしたのは、自分の頭で考えることができ、さらに自分の意見を討論のなかで他人にきちんと説明できる人間でした。また知識偏重の教育では、子どもたちは「驕慢の心」を肥大化させることになることと警告し、特に児童教育では、健全な人間関係の構築に重要となる「敬意」と「真摯さ」と「規範遵守」を身につけさせることに注力せよと言います。

息軒の教育論には、現代の教育が直面している課題を解決するヒントがあるように思われます。

AIが子どもたちに勉強を教える時代に人間の教師が担うべき役割とは!?

関連イベント

- 1 安井息軒記念館講座⑥
「安井息軒の育児論と教育論」
日時/令和6年2月3日(土) 10:00~11:45
会場/宮崎市安井息軒記念館・研修室
講師/青山 大介(当館学芸員)
入場/無料
定員/40名(事前申込制)

- 2 展示解説講座
「息軒の娘」について
日時/開催期間中の日曜日 14:30~15:00
会場/宮崎市安井息軒記念館・特別展示室
講師/青山 大介(当館学芸員)
入場/無料
定員/なし(予約不要)